

一、母と子

——優しさと厳しさと——

先日、所用があつて、夕方五時過ぎ、わが団地のバス停からJR中央線高尾駅に向かうバスに乗った。駅まで5^分、普段は10分とかからないが、この夕方は恒例のラッシュ時に当たり、倍くらいの時間がかかる。そこで、古稀にも達した身であれば座席を得たいところだが、生憎の時間帯はなかなか空いていることがない。それは、隣の始発バスターミナルが京王電鉄関連の「高尾わくわくビレッジ」なるリクリエーション施設で、そこを利用した親子連れの集団が引き上げる丁度の時間とよく重なるからだ。

その日も、車内はぎっしり満員、小学校中・高学年くらいの子どもたちとその母親たちで蒸せかえていた。このような時、これは昨今の風潮でもあるが、いや、私が年よりも少しは若く見えているのならいいのだが、いまだかつて、年相応に席を譲られたことがない。だが、この日は違った。バスが発車するよりも早く、入り口手前の吊革につかまっていた私の娘ほどの若い母親が、「こちらにどうぞ」と言つて、目の前の席に座っていた小学3、4年

生位の少女を立たせた。少女はかなり疲れていると見え、少しうとうとしていたようで、一瞬いやいやをするように立ち洩ったが、母親は委細構わず手を引いて立たせ、どうぞ、とまた手で差し示す。思わず、

「いや、私、まだ若いから、大丈夫です」

と強がつて見せたが、母親はきかない。どうぞ、どうぞと、座席の前を大きく空けて、誘い込む。それでもまだ、

「でも、お嬢さん、疲れているように見えますが」

と一応の遠慮をして見せると、

「いいえ、この子、随分と休んでいたから、大丈夫なんです」

と、母親はいつそう身を退き、気持ちを示す。

これ以上の辞退は反って失礼だろう。私は、つい、言わずもがなのひと言を言つて席を譲ってもらうことにした。

「じゃあ、私も70歳のおじいさんになったから、座らせてもらおう、ありがとうございます」やりとりを見ていた周囲の母親たちから、いくつか小さな笑い声が洩れた。若い母親は、にゆうつと微笑つて頷き、私に氣遣つてか、軽く会釈してから少女を連れて前方に移動し、運転席傍の柱に身を委ねた。少女は、疲れているのか、不満を訴えたのか、母親に抱きつき、その胸元に顔を埋めた。母親は、左の腕を回して少女を抱き、謝るように、諭すように、

残した右手で少女の髪をいとおしそうに撫で始めた。そしてそのまま、バスが終着地・高尾駅に着くまで、ずっと撫で続けていた。

強くて優しい、何と見事な母親であろうか。私は、目をつむって、見ぬように見られぬように、しつければかくあるべしとの思いに心うたれながら、その情景に見惚れていた。

中央線高尾駅前に持っているマンション、愛着著しい家で、十年間住んだが、やむない事情で離れ、以後、それを時々貸し家になっている。過日、貸してわずか一年余り、借り主が、都心近くの自宅住居に戻るとのこと。子どもたちを中央線高尾以西にある「スタイナー学校」という特殊な小学校に通わせていて、通学と親の都心への通勤の両方に大変便利なこの駅前マンションをどうしても借りたいというので、他の借家希望者を断つてまで貸したのである。三人目の子どもが産まれることになって少し手狭になったから、という明け渡し理由は訝しかった。

家が空いてから、リニューアルするために、職人さんを連れてマンションの入り口にさしかかったときである。階下の住人のMさんが、偶々のこの機会を逃してはなるものかといった思い詰めた様子で、駐車場から駆けてきた。そして、言われるのである。次に貸すときは、必ず子どもが室内で大騒ぎしないようきつく注意して欲しい……。階上の二人の子どもの走り回る音に耐えきれず、ノイローゼになって近くの息子夫婦のところへ何日も逃げ出したこ

とがあつたという。恐縮した様と、しかし言わずにいられないその風情に、申し訳なさで一杯になった。かく言う私が、このマンションを出た理由が全く同じだったからだ。階上から日夜を問わず響いてくる子どもたちの足音・騒音。私の場合、互いに手を振れば合図・連絡ができる至近のマンションを一時避難場所として購入し、そこで二年間、読書・研究の生活を送った末に今の一戸建て住居に引っ越した。この度は、迷惑元が転じていったが、Mさんは、堪えきれずに一度電話で注意したことが転居の理由になったのではないかと、懸念している。その後、室内リニューアル工事を行う挨拶に赴いたところ、今度はMさんの奥様も同じように、その苦情電話が原因で借家人が家を空けることになったのではないかと、しきりに恐縮される。とんでもない。詫びる理由など、どこにもない。詫びなければならないのは、ひとえに騒音を引き起こしている方なのだ。

新たな借家人を求むべく、駅前の不動産屋に行った折この話をする、その受け付け嬢が、スタイナー学校は子どもを自由にのびのび育てる学校だから親が理念に添って子どもにあまり注意しなかったのではないか、とうがったことを言う。それとこれとは別の話、他所様に迷惑を掛けない子どもを育てることは、あらゆる教育の根本目標、つまりは、集団住宅の中で住まうことの基本的教育、延いては集団生活をする際の社会性の育成に失敗しているということなのである。

教育というもの、土台、毅然たる厳しさがなくては叶わぬ。だから、その過程で、未熟な対象者との間に深刻な対立や衝突が生じるのも、不可避的である。長かった教員生活をつい最近に終え、今になれば様々な葛藤場面もひたすら懐かしいものになっているのだが、しかし再びはもう、あの緊張関係は経験したくないものだ。大げさに言えば、〈教育〉なるものは神経をすり減らす営み、老いの身にはもはや、二度とは関わり経験することのない、懐かしいだけのものであつてよい。これは家庭教育、子育てについても全く同様である。

孫は可愛い、と誰もが言う。確かにその可愛さは、孫の親たる息子が子どもであつた時よりもはるかに優る。しかし私は、孫の顔を見に息子一家の処に行く時は拘りなく楽しいが、孫たちがわが家に来る時には、ちよつとばかり抵抗がある。訪ねた際は、土産でも持つて可愛い可愛いとやっていれば事済むが、彼らがこちらに來た時には、それだけではけつして済まない、即ち、子どもというもの、言わずと知れたわがまま者ゆえ、嫌でもしつけ（教育）を行わなくてはならなくなるからである。

息子の家では、しつけの主権者は息子夫婦、だから私たち祖父母は嘴を挟まないし、また挟まない方が円満でよい。しかし、こちらの家にあつては、事情が異なる。主権者は私たち祖父母であり、もし親たちが子どものがままを見過（じ）して私たち（ば）がそれに同調すれば、あるいは親たちの教育方針に反して甘やかせば、それは「祖父祖母育ち（じ）（ば）は三文安い」という喻にも通じて、孫たちにとつてもけつして好ましくない。といつて、きつく叱つて訓育すれば、

もともと息子夫婦は何よりも子どもたちが祖父母に愛される様を見たいのであり、その気持ちを損ねることになる。あれやこれや、孫たちが来ると、私たちは気を遣って、それなり大変なのである。しかし、去年も今年も、孫たちは盛夏に半月あまりやってきた。さあ大変、嫌でも、祖父権発動のしつけ場面がやってくる。

さて、息子夫婦はそろって男子の孫三人を恵んでくれた。2歳とびとびに誕生し、一番下が今夏3歳である。この末子、生まれた時から年の近い兄たちにもまれ、成長が早い。もちろん今後の保証はないが、今のところ目から鼻に抜けている。数量観念にも優れ、少し教えれば、九九を使って数を計算することも可能なほどだ。しかし、丁度自己主張たけなわの第一次反抗期、そのわがままぶりにはほとほと手を焼くのである。

皆で順番を決め（じゃんけん）、ケーキを好きなものから取っていくことになった。モンブランが二つ入っていたが、それが順位上位の私と中の子に取られ早々となくなった。と、この末の子が、それまでやり方を納得していたのに、お兄ちゃんの前でモンブランが欲しいと言って泣き出し、聞かなくなった。すると中の子が、じゃんけんで負けたら、譲ってもいいと案を出し、じゃんけんが始まった。しかし、何回やっても、みな兄が勝つ。末子が泣き出す。兄が譲って、今度は三回戦を提案した。が、兄が勝って次は五回戦。しかし、また兄が勝って弟が大泣きになる。何のことはない、兄は、何とか弟にケーキを譲るための名分を立てさせようと躍起になっていたのだがうまく行かず、それを弟が理解できず辛抱もしきれず、収

拾がつかなくなった。私の二人の子どもは、このようなわがままをしたことがないが、もししていたら、私はついには頬を張っていただろう。孫たちの親の目の前で私がそれをするわけにはいかないし、結局私は、決着のつかないそのケーキを取り上げ、私のモンブランを褒美として知恵者の兄に与え、一旦取り上げたケーキを弟に与えて、お茶を濁した。もちろん末子は勝利歎喜の勝鬨である。

翌日おやつ時間に、その末子が、今度は私のあんパンが欲しいと言って、また強情を張り始めた。恥ずかしながら打ち明けると、あんパンは私の大好物で、これをおやつや留守番のご褒美土産にもらうと、もうご機嫌である。そのことは孫たちも周知していた。今度はそのあんパンを狙つての宣戦布告である。断固拒否すると、母親の胸に飛び込んで泣きに泣いた。これは絶好のチャンス、

「わがまま者、勝手に泣いていなさい」

私はそう言つて突き放し、敢えて殊更、大きな音を立ててパンを食した。前日、弟にケーキを譲ろうとした中の子が、目を丸くして、私をとらえていた。この真ん中の子、兄弟二人に挟まれて、かなり抑圧的で、良い子志向が垣間見える。これは発育上、あまり好ましくない。この祖父の行動は、その傾性を削ぎ、自己主張行動を誘出するための、示範行為でもあった。——（心理学的に言くと、アサーティブテクニクまたはモデリング）

おやつの後、庭に出た私を中の子だけが追つてきた。信頼と親しみを増した眼差しである。

思わず抱き上げると、赤ん坊ではないよと言わんばかりに、「抱かんでもええ」と、小聲ながら、気持ちをはっきり表明してくれた。

その翌日、またおやつの時間である。おやつ分配の前に、私は末子に言った。

「U君、昨日はわがまま言ったね。あれは何だったかな」

末子は元気に言った。

「あんパン！」

私は威儀を正して、

「よし、分かっているな。今日はもう、わがままは言わないな」

「うん」と力強い返事があって、この夏のおやつ戦争が終了した。

教育の真髄は、厳しさとそれを裏打ちして支える優しさで成り立ち、実は極めてシンプルである。しかし、この二つを巧みに交えて行うことは決して易しいことではない。沢山の学校・家庭教育上の失敗事例がそれをよく示し、大きく織り違えたものの中からは、世間を震撼させる事件がまま引き起こされている。まことに、教育というものは難しい。それだけに、しつけ上手な親たちを見ると、職業がら思わず賞賛の手を叩き、ふと応援してみたくなる。

見て見ぬようにその母と子を見ている中に、バスが終点高尾駅に到着間近となった。私は、

礼を言うべく、母子が先に降りない中にと、バスの先頭口に急ぐ。少女がようやく母の胸から顔を上げ、丁度その顔と向き合った。

「ありがとう。おじさん……」と言いかけて、言い直した。「おじいちゃん、とつても助かった。これから元気に用を足しに行けます。ありがとう」

さして嬉しそうにもなく、少女は眠気半分の顔で頷いた。私はさらに、今度は少女へともなく、その母へともなく言った。

「こんな優しいお母さんに育てられて、きつと、優しい立派な人になりますね。頑張つてね」少女の顔がさつと輝き、若い母親の顔が、そーっとはにかむ。

「さよなら」と言つて、先頭切つて出口の階段を下り始めた私の背中に、明るい少女の声が飛んできた。

「さようなら」

振り返ると、母親に凭れて、少女が小さく手を振っていた。つれて母親も手を振ってくる。世に母と子が睦み合う姿ほど和やかで美しいものはないが、この母子の姿はまるでカーテンコールで挨拶をしている舞台女優のように、まぶしく輝いて見え、何やら優しい世の中の温もりをほのぼのと私に伝えてきた。

手を振つて応えながら、私はやみがたく、ときめいていた。